

# 園の保護者による保育者への援助要請行動

— 満足度および援助要請意図の関連 —

笠原正洋

## Parents' Help-Seeking from Nursery School Teachers: The Relationship between Parents' Satisfaction and Help-Seeking Intention

Masahiro Kasahara  
(2005年11月29日受理)

### 問題と目的

保育士や幼稚園教諭は、子どもを養育している保護者（養育者、親と表記）に対して、子どもを保育する役割と、親の子育てにともなう様々な悩みの相談に応じる役割をも担っている。特に保育士に関しては、その相談についての役割が「子育ての相談・助言に応じること」として児童福祉法にも明記された。多くの親が公的な相談機関に相談に行きにくいという現状をふまえるならば（Keller & McDade, 2000; Stefl & Prospero, 1985）、保育士によるケアと保育を基盤とする予防的・成長促進的な役割（Duffy & Wong, 1999）が、今後ますます求められていくことになるだろう。実際、保育園や幼稚園において、子育ての悩みを保護者が保育者（以降、保育士と幼稚園教諭を総称して保育者と記述する）に相談できることは、保育所の第三者評価基準の評価項目として設定されている（たとえば、「一人一人の保護者と、日常的な情報交換に加え、個別面談などを行っている」や「子どもの発達や育児などについて、懇談会などの話し合いの場に加えて、保護者と共通理解を得るための機会を設けている」）。すなわち、親による保育者への相談は、保育の質とも関連し、親との信頼関係を強める重要な行為であるとわかる（「あなたの園の自己点検—保育の質と信頼感をより一層高めるために—」より）。さらに、虐待問題に関して言及するならば、下泉(2001)の調査によると、保育者が園で被虐待を発見したきつ

けとして、10.6%が「養育について親が相談にきた」、7.3%が「他の問題で親が相談にきた」、6.2%が「虐待について親が相談にきた」ことからだった。このように、発見の経緯の約24.2%が、保育者への相談によるのである。したがって虐待の早期発見という意味でも、保育者へ相談できるという現象は重要な意味を持つと考えられる。

保育者が親の子育て相談に応じていくためには、保育者がそのような役割を果たしていると親に認知され、しかも相談する上で障害となるような要因がない状況が必要である。実際、育児に何らかのストレスを抱えた親が保育者に相談した割合は、13.68~44.21%（笠原, 2000）、23.73~52.67%（笠原, 2004）であり、親が保育者に相談できている状況にあるとは言い難い。これまで、親が保育者に相談するという援助要請行動に影響する諸要因の検討を行ってきたが（笠原, 1999, 2000, 2004）、これまでの研究は、相談の促進要因として「専門性の認知」、抑制要因として「相談を回避する態度」の影響を主に検討してきており、親側の個人差要因を十分に検討できていなかった。

これまでの研究において、援助要請を左右する個人差要因の一つに自尊心のレベルが挙げられる。一貫性仮説（consistency hypothesis）と傷害仮説（vulnerability hypothesis）の2つの説明理論があり、一貫性仮説、すなわち、自尊心の高い人は援助要請することを自己にとって脅威であると認知し、それが肯定的な自己認知と不協和を起こすため援助要請

しないという説を支持する報告が多い。そこで、本研究の一つの目的は、育児において自己を有能であると評価したり自己価値を高いと認知する親ほど援助要請行動を用いるか否か検討する。

次の問題として、本研究では親が保育者に相談した後の満足度に関して検討を加える。すなわち、親が相談してよかったと評価するような保育者の行為や態度とはどのようなものかについて検討する。保育者は、悩みを抱えながらまだ専門家を訪れていない親が比較的相談しやすい相談相手である（笠原, 1999）。つまり、保育者は、悩みを抱えた親が初めて出会う相談の専門家と言っても良いだろう。しかし、保育者による育児相談は必ずしもうまくいっているわけではない。例えば、吉川（1997）は、保育者が指導熱心なあまり親に対して指示を繰り返していると、親の内面に「自分の育児を否定された」という思いが生じ、保育者に対する反発という結果につながることを報告している。このように保育者の対応によっては、親の自責の念が強くなり、その否定的な感情が子どもへの対応に影響してしまい、結果的に親子関係が悪化することにもなりかねないのである。実際、保育以外の分野でも、専門家の対応によって親の悩みが悪化するという指摘もあり、専門家の指導や支援のあり方に関する研究が行われている（保健婦雑誌, 1988; 広野・山中・永瀬・榊原・巷野, 1997）。

保育者による育児相談時の行動や態度は、親の悩みの受容や育児に対する動機づけにも影響を及ぼす重要な要因である。しかし、そのあり方に関しては、あまり研究がなされていない。保育者の専門性の一部を構成する育児相談での対応についても、それをどのように測定していくのか共通の尺度も存在していない。そのため、保育者との育児相談の中で何が生じているのかを研究するための道具さえもない状況にあるとあって良いだろう。そこで、本研究では、親との育児相談の中で保育者がとる態度や行動を「育児相談対応行動」と呼び、それを測定する尺度項目を作成・選定する。そして、保育者に相談して良かったという相談満足感との関係を検討する。そして最終的に、相談対応行動、相談満足感、および今後も保育者に相談するか否かという相談意図（援助要請意図）との関連を検討する。

## 方法

### 1. 被験者

調査協力の得られた保育園保護者243名。そのうち回収できた224名（平均35歳）を分析対象とした。

## 2. 質問紙

### (1) 育児有能感

①コンピテンス。日本版 PSI 尺度（奈良間他, 1999）の親としての有能さ因子7項目を利用した。②自尊心尺度10項目（Rosenberg, 1962）。

### (2) 抑制態度

笠原（2004）で検討した呼応性不安、強制不安、イメージ低下不安、相談する時間や場の制約に関して各4項目計16項目を利用した。

### (3) 促進態度

笠原（2004）で検討した相談や助言の専門性、場作りや連携の専門性、保育専門性に関する14項目を利用した。

### (4) 子どもの悩み

①悩みの同定。17項目から1つ選択させた。17の選択肢とは以下の通りである。1. 気が散りやすい。2. 内気、消極的で友達が少ない、自分から友達と遊べない。3. 園に行きたがらない。4. 自己主張が強く、ききわけがない、自分勝手な面がある。5. 友達づきあいで乱暴な面がある。6. 激しく泣いたり、ぐずるとなだめにくい面がある。7. いい子すぎて、無理をしている面がある。8. 病気がちである、虚弱である。9. 言葉の発達が他の子どもよりも遅れている気がする。10. 身体や運動面の発達が他の子どもよりも遅れている気がする。11. 他の子どもにくらべて、手先が不器用な気がする。12. 指しゃぶりなどの癖がある。13. 夜寝る時間が遅く、なかなか朝起きれない。14. 偏食がある、食が細い、遊び食べなどをする。15. お漏らしすることがある。16. 夜泣きをしたり、寝ぼけて声を出したりする。17. まわりの大人が指示しないと、動かない。②頻度と深刻度。4件法で評定させた。

#### a) 子どもの悩みに関する保育者への援助要請行動

①援助要請行動。悩みをどれくらい保育者に相談したかを尋ねた。1は、「まったく相談しなかった」から6の「かなり相談した」の6件法である。②援助要請理由。4項目を自作した（「とにかく聴いてほしい」「考える糸口がほしい」「はっきり教えてほしい」「解決してほしい」）。6件法で評定。

#### b) 援助要請（相談）満足度

全体的にみてどれくらい満足したかという「全体的相談満足度」、悩みが解消したので満足できたという「解消による満足度」、そし

て悩みが解消したとは言えないが聞いてもらって助かった、ほっとしたという「安心感による満足度」の3項目である。特に、3つ目の項目は、子どもの病気そのものがよくなるなくても子どもの状態を理解することができれば母親は安定した気持ちで育児できるという指摘（植松・相場・住友・久保田・小林・榊原，1996；広野・山中・永瀬・巷野，1997）をふまえて設定した。

#### c) 保育者による相談対応行動

相談時の保育者の行動・態度…笠原（1999，2004）の相談に行きたい保育者の特徴尺度の中の下位尺度である「態度・助言」因子や「指摘の明確さ」因子を参考にして、「育児相談対応行動」尺度を作成した。具体的には、「受容」を反映する項目を5項目、「助言や指摘」を反映する項目6項目を設定した。

#### d) 援助要請意図

保育者，知人，専門家（医療機関，児童相談所，発達や福祉に関する公共の療育センター，大学などの心理相談所などの専門機関の相談員や専門家と説明）に対する援助要請意図を6件法で評定。

#### (5) 親自身の悩み

親自身の悩みに対しても上記の(4)を親の悩みに改訂して回答を求めた。親の悩みに関しては、先行研究に基づいて7つの選択肢を設定した。それは以下の通りである。1. 子育てのことで何かと後悔したり，自分自身をつい責めたりする。2. 家族が協力してくれない，たいへんさをわかってくれない。3. 子どもとゆっくり過

ごす時間がとれない。4. なぜか子どもと相性が合わない，子どもを好きになれない。5. つらさやたいへんさを誰に相談していいのかわからない。6. つい叩いてしまったり，きつい言葉をかけてしまう。7. 自分の育児に自信が持てない。

## 結果と考察

### 1. 尺度の整理

尺度はすべて因子分析を実施し $\alpha$ 係数を確認した。因子分析は，重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転を用いた。

(1)コンピテンス（表1）…1因子が確認された（5項目）。②自己観（表2）…肯定的自己観6項目のみを分析で利用する。③抑制態度（表3）…3因子が確認された。第1因子は，強制不安とイメージ低下懸念が一つの因子にまとまった。第2因子は呼応性不安，第3因子は相談する時間や場の制約になった。④促進態度（表4）…保育の専門性，相談助言の専門性，場作りや連携の専門性の3因子が確認された。⑤保育者による援助行動（表5）…2因子が確認された。第1因子は指摘の明確さや見方の広がりなど助言にかかわる因子と考えられた。第2因子は，気持ちを受けとめてくれたなど受容に関する因子だった。基本統計量を表6に提示する。

### 2. 援助要請行動（表7）

(1) 子どもの悩みに対する援助要請行動を説明する要因

コンピテンスと自己観が態度を媒介して援助要請行動へ影響するモデルに対して，重回帰分

表1. 育児コンピテンス ( $\alpha = .84$ )

1 私は子どもの世話をしている時、有能でうまくできていると感じる。
2 子どもに何かをさせようとする時、またさせないようにする時、だいたいうまく感じている。
3 私は親であることをたのしんでいる。
6 私は親として、どんなことがおこってもうまくやれると思う。
7 私は親として、よい親だと思う。

表2. 肯定的自己観 ( $\alpha = .87$ )

1 私は、自分が少なくとも他の人と同じくらいの価値があるだろうと思う。
2 私は自分にはよいところがたくさんあると思う。
4 他のほとんどの人と同じくらいには何でもできると思う。
5 私は、自分にはあまり自慢できるところがないと思う(*)
6 私は、自分に対して肯定的に感じている。
7 全般的に私は自分自身に満足している。

表3. 抑制態度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3
<b>第1因子 強制不安 (<math>\alpha=.90</math>)</b>			
2 先生に相談したら、無理に何かをしなければならなくなると思う。	.568	.312	
4 先生に相談していることが、まわりの人に知られると噂をされてしまう。	.565		
6 先生に相談したら、自分の希望と関係なく、生活スタイルを変えてしまわなければならないと思う。	.857		
8 先生に相談すると、まわりの人から未熟で、能力がないと思われてしまう。	.777		
10 先生に相談したら、話したくないことでも無理に話さなければならないような気がする。	.662		
12 先生に相談すると、まわりの人たちからあまり好ましく思われないことになる。	.849		
14 先生に相談したら、自分の感じ方や価値観を変えてしまわなければならないと思う。	.812		
<b>第2因子 呼応性不安 (<math>\alpha=.89</math>)</b>			
1 先生に相談したとき、先生が私の悩みを真剣に聴いてくれるか不安だ。		.769	
3 先生に相談しようにも、忙しそうで声をかけられない。		.507	
5 先生に相談したとき、先生が私の考えや価値観を理解してくれるか不安だ。		.777	
9 先生に相談したとき、先生が私の抱えている問題をきちんと理解してくれるか不安だ。		.826	
13 先生に相談したとき、先生が私の問題をうまく指摘してくれるか不安だ。		.763	
<b>第3因子 制約 (<math>\alpha=.83</math>)</b>			
7 先生に相談しようにも、ゆつくりと話せる場所がない。			.766
11 相談会など定期的に開かれていないので先生と個人的に話せる場や時間がない。			.643
15 先生に相談しようにも、他人の目を気にせず静かに話せる場所がない。			.905
因子相関行列	因子2	.602	
	因子3	.395	.545

重みづけのない最小2乗、プロマックス回転

表4. 促進態度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3
<b>第1因子 保育の専門 (<math>\alpha=.91</math>)</b>			
1 いつも気軽に声をかけてくれた。	.583		
9 何かにつけ私たち親に子どもの様子を知らせてくれた。	.824		
10 遊びや音楽を通して子どもが自己表現し、充実感を味わえるようにしてくれた。	.937		
13 身近な存在に感じられた。	.858		
14 絵本や遊具でのやりとりを通して、子どもの情緒や感受性を育ててくれた。	.933		
<b>第2因子 相談専門 (<math>\alpha=.949</math>)</b>			
2 子どもの発達や育児についての専門知識が豊富であることを感じさせた。		.958	
3 子どものことや子育てに関して悩んでいる親の相談に応じて、支えてくれた。		.943	
6 保育や育児の経験が豊富なことを感じさせた。		.940	
7 しつけや基本的な生活習慣について保護者に助言したり、指導してくれた。		.680	
11 子どもの発達についての専門的知識を持ち、それに基づいて保護者に助言したり、指導してくれた。		.626	
<b>第3因子 場作り (<math>\alpha=.76</math>)</b>			
4 子どもや子育てのことで悩んでいる保護者に、必要に応じて、関係の専門機関(※注1)を紹介してくれた。			.876
8 関係の専門機関(※注1)と連携を取りながら、保護者や子どもを保育の場で支えてくれた。			.926
12 親同士が集まれる、サークル、指導や助言をもらえる場を提供してくれた。			.631
因子相関行列	因子2	.719	
	因子3	.353	.466

重みづけ最小2乗、プロマックス回転

表5. 保育者による援助行動の因子分析結果

項目	因子1	因子2
<b>第1因子 助言 (<math>\alpha=.93</math>)</b>		
3 子ども自身についても、親の接し方についても、良い点も、悪い点もはっきりと教えてくれた。	.672	
8 どう行動したらよいか、こちらが実行しやすいアドバイスだった。	.661	
9 親とは違った見方を教えられた。	.814	
11 一般論ではなく、こちらが必要とする情報や解決策を与えてくれた。	.739	
12 相談することで、考える手がかりやヒントのようなものに気づかされた。	.682	
13 門性に裏打ちされたアドバイスだった。	.997	
<b>第2因子 受容 (<math>\alpha=.91</math>)</b>		
1 悩みを最後まできちんと聴いてくれた。		.830
2 相談した結果、迷っている不安や気持ちを整理できた。		.742
4 親のきつさや不安を理解した上で話を聴いてくれた。		.682
5 先生のアドバイスによって、悩みや不安が解消した。		.543
7 気持ちを受けとめてくれた。		.823
10 一緒に考えるという姿勢が感じられた。		.786
因子相関行列	因子2	.778

重みづけ最小2乗、プロマックス回転

表6. 基本統計

変数	平均	SD	$\alpha$
コンピテンス	3.16	.82	.84
肯定的自己観	3.67	.60	.87
抑制要因			
強制不安	1.95	.75	.90
呼応性不安	2.60	.99	.89
制約	2.33	1.03	.83
促進要因			
保育専門	4.58	.99	.91
相談専門	4.06	1.13	.94
場作り	2.95	1.08	.76
子ども			
悩み程度	2.34	.92	—
HS行動	3.53	1.45	—
HS満足	3.89	1.23	—
援助(助言)	3.63	1.01	.93
援助(受容)	4.24	.89	.91
HS意図	3.96	1.12	—
母親			
悩み程度	2.44	.94	—
HS行動	2.24	1.16	—
HS満足	3.97	1.34	—
援助(助言)	3.81	.89	—
援助(受容)	4.42	.70	—
HS意図	3.09	1.15	—

析の反復によるパス解析を行った。その結果、悩みの程度 ( $\beta=.27, p<.01$ ) と促進要因の一つである相談専門要因 ( $\beta=.22, p<.10$ ) が直接、援助要請行動に影響していた ( $F_{(9,217)}=2.83, R^2=.11, p<.01$ )。保育者への援助要請場面では、親の育児有能感が態度を媒介して援助要請に影響するという因果関係を確認することができなかった。

## (2) 親の悩みに対する援助要請行動を説明する要因

(1)と同じ分析を行った。その結果、悩みの程度 ( $\beta=.33, p<.001$ ) だけが直接、援助要請行動に影響していた ( $F_{(9,213)}=4.31, R^2=.16, p<.001$ )。態度要因は関連していなかった。

## 3. 援助要請 (相談) 満足度 (表8)

### (1) 子どもの悩みを相談した後の満足度

224名中138名 (61.6%) が相談していた。この138名に対して、満足度に影響する要因を探索的に検討してみた。4つの援助要請理由と悩みの深刻さを統制した上で、保育者の援助行動である受容と助言の2要因の関連を検討した。その結果、満足度にはその2つの要因の寄与が大きいことがわかった ( $R^2$ 変化量=.61,  $p<.001$ )。「ほっとしたい ( $\beta=.16, p<.01$ )」, 「指摘してほしい ( $\beta=.20, p<.01$ )」, 「解決してほしい ( $\beta=-.17, p<.01$ )」という援助要請理由も影響していたが、保育者の受容行動が主要な規程要因だった ( $F_{(7,135)}=50.38, R^2=.73, p<.001$ ;  $\beta=.69, p<.001$ )。

## (2) 親自身の悩みを相談した後の満足度

218名中38名(17.43%)が母親本人に関連する不安を相談していた。この38名に対して分析を行ったところ、満足度には援助行動2要因の寄与が大きいことがわかった( $R^2$ 変化量=.54,  $p<.001$ )。4つの援助要請理由はまったく満足度と関連が認められなかった。保育者の受容行動と助言行動が有意に満足度を規定していた( $F_{(7,33)}=6.21$ ,  $R^2=.63$ ,  $p<.001$ ; 受容  $\beta=.43$ ,  $p<.10$ ; 助言  $\beta=.46$ ,  $p<.10$ )。

## 4. 援助要請意図を説明する要因(表9)

### (1) 子どもの悩みを保育者へ相談する意図(援助要請意図)

①保育者への援助要請意図と知人や専門家に対する援助要請意図との平均値を比較してみた。その結果、知人(平均4.55,  $SD=1.11$ ) > 保育者 > 専門家(3.41, 1.32)という結果になった。②コンピテンスと自己観が態度を媒介して援助要請意図へ影響するモデルに対して、重回帰分析の反復によるパス解析を行った。その結果、悩みの程度( $\beta=.17$ ,  $p<.05$ )と促進要因の一つである相談専門要因( $\beta=.22$ ,  $p<.10$ )が直接、援助要請意図に影響していた( $F_{(9,217)}=2.24$ ,  $R^2=.09$ ,  $p<.05$ )。ここでも育児有能感が態度を媒介して援助要請意図に影響するというモデルを確認することができなかった。

### (2) 親自身の悩みを保育者へ相談する意図(援助要請意図)

①平均値を比較したところ、知人(平均4.29,  $SD=1.10$ ) > 保育者 ≒ 専門家(2.99, 1.25)だった。②2(3)と同様の分析を行ったところ、悩みの程度( $\beta=.22$ ,  $p<.01$ )と促進要因の一つである相談専門要因( $\beta=.26$ ,  $p<.05$ )が直接、援助要請意図に影響していた( $F_{(9,212)}=2.67$ ,  $R^2=.11$ ,  $p<.01$ )。ここでも育児有能感が態度を媒介して援助要請意図に影響するというモデルを確認することができなかった。

### (3) 保育者への相談経験のある親のみを分析対象とした場合(表10)

保育者に相談した経験がある親のデータのみを集め、何が援助要請意図を予測するのか分析した。分析には同様に階層的重回帰分析を用いた。コンピテンスと自己観が態度を媒介して援助要請意図へ影響するモデルに対して、重回帰分析の反復によるパス解析を行った。その結果、①子どもの悩みに関しては、相談満足度( $\beta=.23$ ,  $p<.10$ )が援助要請意図に影響する傾向が

認められた( $F_{(10,122)}=1.72$ ,  $R^2=.09$ ,  $p<.10$ )。ここでも育児有能感が態度を媒介して援助要請意図に影響するというモデルを確認することができなかった。また、②親の悩みに関しては、悩みの程度( $\beta=.29$ ,  $p<.01$ )と促進要因の一つである相談専門要因( $\beta=.37$ ,  $p<.05$ )が直接、援助要請意図に影響していた( $F_{(10,115)}=2.91$ ,  $R^2=.20$ ,  $p<.01$ )。

以上より、悩みを抱えた親が保育者へ相談するためには、保育者に相談の専門性があると親に認知されることが影響していることがわかった。そして、子どもの悩みを保育者に相談する場合、受けとめてもらえるという受容感が相談の満足度に強く影響していることがわかった。さらに、今後も保育者に相談すると思うかという援助要請意図について、保育者へ相談した経験がある人に限定して分析を行ってみると、相談の満足度の強さが援助要請意図を高めていた。しかし、保育者への相談経験がない人も含めて分析を行ったところ、保育者に相談の専門性があるとの認知が援助要請意図を強めることがわかった。

このことから、実践上の示唆として、保育者への相談経験がある親に対しては、親の相談の満足度をより高めていくために、保育者が話を聴く時の「受容」行動を、より強化していくことが必要だと言えよう。これは従来のカウンセリング研修で対応できると考えられる。しかし、問題は、保育者を相談相手として考えていない親たちに対する取り組みである。このような親は悩みを抱えたとしても相談資源として保育者を想定していないだろう。本研究の結果からは、そのような親が保育者を相談の専門性と認知することが重要であると示された。この点を解明するために、今後、保育者が日々の保育行為の中で、いかにして相談専門性を実現するかを明らかにしていく必要がある。

また、今回の調査では、親の育児有能感や自尊心という個人要因は援助要請に関連が認められなかった。これについては、親自身がどのような子育ての価値観や目標を持っているのか、すなわち子育て志向を概念化し尺度構成を行うことによってさらに検討を行っていく。

表7. 援助要請行動を予測する階層的重回帰分析結果

	子どもの悩み(n=218)		親の悩み(n=214)	
	標準偏回帰係数( $\beta$ )		標準偏回帰係数( $\beta$ )	
	step 1	step 2	step 1	step 2
深刻度	.254 **	.271 **	.333 **	.329 **
コンピテンス	.101	.095	.054	.058
自己観	.049	.049	.064	.029
強制不安		.021		-.129
呼応性不安		-.050		.008
制約		.062		.077
保育専門		-.011		.060
相談専門		.223 †		.168
場作り		-.042		-.004
$R$	.260 **	.330 **	.318	.400 **
$R^2$	.055	.109	.101	.160
$\Delta R^2$		.041 ns		.059 *

† $p < .10$ . \* $p < .05$ . \*\* $p < .01$ .

表8. 相談後の満足度を予測する階層的重回帰分析結果

	子どもの悩み(n=136)		親の悩み(n=34)	
	標準偏回帰係数( $\beta$ )		標準偏回帰係数( $\beta$ )	
	step 1	step 2	step 1	step 2
深刻度	-.173 †	-.084	-.319	.088
ほっとしたい	.228 *	.155 **	.038	.065
糸口がほしい	.121	.009	.191	.225
指摘してほしい	.182	.197 **	.050	-.213
解決してほしい	-.170	-.169 **	-.041	-.256
助言		.135 †		.463 †
受容		.685 **		.429 †
$R$	.352 **	.857 **	.297 ns	.791 **
$R^2$	.124	.734	.088	.626
$\Delta R^2$		.610 **		.537 **

† $p < .10$ . \* $p < .05$ . \*\* $p < .01$ .

表9. 援助要請意図を予測する階層的重回帰分析結果

	子どもの悩み(n=216)		親の悩み(n=213)	
	標準偏回帰係数( $\beta$ )		標準偏回帰係数( $\beta$ )	
	step 1	step 2	step 1	step 2
深刻度	.161	.172 *	.205 **	.217 **
コンピテンス	.055	.030	.075	.088
自己観	.048	.067	.098	.087
強制不安		.080		-.077
呼応性不安		.009		-.098
制約		.043		.099
保育専門		.036		-.171
相談専門		.220 †		.257 *
場作り		.025		.072
$R$	.167 ns	.298 **	.214 *	.400 **
$R^2$	.028	.089	.046	.160
$\Delta R^2$		.061 *		.059 *

† $p < .10$ . \* $p < .05$ . \*\* $p < .01$ .

表10. 援助要請意図を予測する階層的重回帰分析結果（相談者のみ）

	子どもの悩み(n=138)		親の悩み(n=38)	
	標準偏回帰係数( $\beta$ )		標準偏回帰係数( $\beta$ )	
	step 1	step 2	step 1	step 2
深刻度	.05	.08	.27 **	.29 **
コンピテンス	.05	.02	-.02	.01
自己観	.07	.06	.17 †	.16
強制不安		.11		-.17
呼応性不安		-.10		.06
制約		.07		.12
保育専門		.06		-.18
相談専門		.03		.37 *
場作り		.03		.02
相談満足		.23 †		.16
$R$	.10 ns	.35 †	.30 *	.45 **
$R^2$	.01	.12	.09	.20
$\Delta R^2$		.11 *		.11 *

† $p < .10$ . \* $p < .05$ . \*\* $p < .01$ .

## 引用文献

- Duffy, K. G., & Wong, F.Y. (1999). コミュニティ心理学：社会問題への理解と援助（植村勝彦，監訳）．京都：ナカニシヤ出版．（Duffy, K. G., & Wong, F. Y. (1996). *Community Psychology*. Allyn & Bacon.）
- 広野優子・山中龍宏・永瀬春美・巷野悟郎．（1997）．育児に関する情報のうけとられ方の問題点 — 電話相談からの検討 — ．小児保健研究, 56, 801-807.
- 広野優子・山中龍宏・永瀬春美・榊原洋一・巷野悟郎．（1997）．電話による育児相談の質についての検討．小児保健研究, 56, 453-458.
- 笠原正洋．（1999）．保育者による育児相談への保護者の意識．保育学研究, 37(2), 63-71.
- 笠原正洋．（2000）．保育者による育児支援：子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から．中村学園研究紀要, 32, 51-58.
- 笠原正洋．（2002）．自己隠蔽，カウンセリング恐怖，問題の認知と援助要請意図との関連．中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 34, 17-24.
- 笠原正洋．（2004）．保育園児の保護者が子育ての悩みを保育者に相談することに何がかかわっているのか．中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 36, 25-31.
- Keller, J. & Mcdade, K. (2000). Attitudes of low-income parents toward seeking help with parenting: Implications for practice. *Child Welfare*, 79(3), 285-312.
- Kushner, M.G., & Sher, K.J. (1989). Fear of psychological treatment and its relation to mental health service avoidance. *Professional Psychology: Research and Practice*, 20(4), 251-527.
- Kushner & Sher. (1991). The relation of treatment fearfulness and psychological service utilization: an overview. *Professional Psychology: Research and Practice*, 22(3), 196-203.
- 奈良間美穂・兼松百合子・荒木暁子・丸光恵・中村伸枝・武田淳子・白畑範子・工藤美子．（1999）．日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討．小児保健研究, 58(5), 610-616.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton Univ. Press.
- 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育協議会．（2002）．あなたの園の自己点検 — 保育の質と信頼感をより一層高めるために — 【第三者評価基準】の解釈と運用】
- Stefl, M.E., & Prosperi, D.C. (1985). Barriers to mental health service utilization. *Community Mental Health Journal*, 11, 3-12.
- 植松文子・相場静子・住友真佐美・久保田雅也・小林美由紀・榊原洋一．（1996）．電話での育児相談は利用者にとってどう評価されているか．小児保健研究, 55, 657-662.
- 吉川はる奈．（1997）．地域臨床における保健所心理相談員の役割：育児に強い不安を持つ母親の相談事例を通して．カウンセリング研究, 30, 31-38.

## 付記

調査実施にご理解，ご協力いただきました保護者の方々や保育施設職員のみなさまにたいへん感謝いたします。この研究は，科研費基盤研究(C)「発達臨床場面での保育園保育士の専門性を活かした介入の実態と展開に関する実証的研究」（研究代表：笠原正洋，平成15年度～平成16年度）により行われました。